『承久記絵巻』について

――新資料紹介――

松本寧至

一

『承久記』は、承久三年後鳥羽上皇が、鎌倉幕府討伐の挙に出て、失敗におわるまでの顚末を述べた軍記物語である。さて、この軍記には諸本がある。

一、慈光寺本承久記　一冊
二、前田家本承久記　二冊
三、流布本承久記　二冊
四、承久軍物語　二冊（群書類従本、三冊）

このうち流布本には、慶長、元和の古活字本、寛永十年および無刊記整版本、若干の異同をもつ内閣文庫の写本があり、いずれも上下二巻である。

このほかに絵巻に関係するものとして、右四系統のうちで、四の『承久軍物語』がある。本文のあいだに所々に絵の指定があるが、絵はなく、また指定部分が空白になっているところもあることから、絵巻を作るための草稿本とみなされ、「群

書類従本」として全六巻が三冊に収められている。その原本かと思われるやはり『承久軍物語』上下二冊が内閣文庫にある。

いったい、『承久記』は、他の軍記物、『前九年合戦絵巻』『後三年合戦絵巻』『平治物語絵巻』『蒙古襲来絵巻』などと同様絵巻として行なわれようとした一面があり、すでに、『考古画譜』[1]には、

承久軍繪　三巻

〔補〕本朝畫圖品目云、承久軍之繪、畫工姓名不レ傳、

〔補〕古畫目録云、承久記詞斗殘る、

畫圖品類云、畫工姓名未レ詳、

躬行曰、此繪三巻とあるは、普通の承久記に、後人畫を添しものなるべし、續群書類從第五百七十三、承久兵亂記二巻あり、

と三巻本のあったことが見える。この記述からすると現存していないらしいが、「普通の承久記に、後人畫を添しものなるべし」というのは、流布本を詞書とした絵巻であったろうか。『承久兵乱記』とあるのは絵巻の説明になっているものなのかどうか。

松林靖明氏によると、「和歌山県の龍光院にあったという『承久記絵巻』六巻が昭和十四年四月京都博物館に展示されたというが、現在不明という」とされ[2]（龍光院は高野山の一院）、さらに小柏信重氏によって紹介された『承久記〈流布本〉私家版』がある[3]。これには、交互に絵が配せられているというが、この著書に絵の収められていないのが残念である。ただここで、小柏氏の解説を引用させていただくと、

余が定本とした承久記は遠縁である和達清夫先生から戦時中預ってくれとの御話に承諾し、預っている間に書き直しておいた。更に人名や事件、語句など調査していると、容易に解し難いものがあり、遂に十数年を要した。中には最近になって、漸く解することができたものもあり、此の際、整理できたものを上梓させて戴くよう、了解を求めた所、心

よく承諾された。

この本は胡葉綴七冊になっており、本文と絵とが交互に記されてある。それ故、余が校定する場合、一冊目を巻一、二冊目を巻二、七冊目を巻七とし、本文（全部で五十）を第一章、第二章として書き表わすことにした。

この本には奥書がないため、写された伝来に関しては知ることができない。流布本ともいうべき江戸時代初期の寛永版本と比較すると全体は異ならないが、部分的に異ったものを見出し得る。例えば開巻文を見ると、流布本では「八十二代の帝をば後鳥羽の院とぞ申しける」を、この本では「百王八十二代の帝をば後鳥羽の院とぞ申しける」と百王の二字が入っている。

とある。右の解説で、「百王」は流布本にも入っているが、いわれるように部分的に異同もある。

二

さて、ここで紹介しようとする架蔵本の『承久記絵巻』は全長二六米六〇糎、幅四七糎の長巻。題簽なく無名の絵巻で、これが『承久記絵巻』であることは、内容をみてはじめてわかる。江戸時代後期の写し。白描僅か彩色あり。奥書なし、筆者未詳。

表装、鉄色緞子裂地、茶の雲に龍の模様。紙本。見返し、淡紅色金箔散らし。軸、軸頭は同裂地にて覆う。詞書、平仮名、十三段（途中欠一段あり。現存十二）絵十三図。

本文は慶長古活字本系の本文とほぼ一致し、元和古活字本とは異同が多い。『絵巻』は、後に全文を示すが、その冒頭は、「式部丞朝時は五月晦越後國府中に着て勢そろへ有」云々ではじまるが、その第一段詞書にも次のような問題がある。

岸に添たる同そ道間を伝ふてとめゆけは馬のはな五き十きならへて通るにわつかに一騎斗にあたはす通る道なり

ここが慶長本系本文では、

岸ニ添タル同ソ道間ヲ伝フテ。トメユケハ馬ノ鼻五騎十騎雙ベテ通ルニ不レ能僅ニ一騎計通ル道ナリ

となっている。「不レ能」と返点があるが、このようには訓めない。元和版によると、

岸に添たる岩間の道を傳ふて、とめ行ば、馬の鼻五騎十騎雙べて通るに不レ能、僅かに一騎計通る道也。

とある。これも底本は片仮名本で句読点もないが、やはり訓み方は同じである。しかし「同ソ道間」が「岩間の道」となっている。（いま、平仮名になおした松林靖明氏「新撰日本古典文庫1」の本文による）[4]

絵本との関連で注目される『承久軍物語』なども、

岸にそふたるほそみちはわつかに馬一きとをりかぬるみちなり

とあって、本文はかけ離れている。やはり絵と関係がある、小柏信重氏の『承久記』本文は、

きしにそうたるほそ道の間をつたふてとめゆけば、馬のはな五き十きならべてとをるにあたはず

とあり、これともあわない。また巻立も本巻とはあわない。

結局、慶長古活字本系の本文によって片仮名を平仮名に改めたもので、時によってその訓みを誤ったか改めたかしたと判断すべきであろう。片仮名で補った個所が若干あるのもそれを暗示していよう。『考古画譜』の古川躬行の補記にいう普通の『承久記』に絵を加えたものに相当し、巻数を改めたものか、とも思われる。

また当巻の詞書、絵のすみに四三、四六などの番号があるから、あるいは巻四で、六巻本の模本ではあるまいかとも思われる。ちょうど『承久記』の分量、本文内容の位置からもそう思われる。龍光院本は、さきにいわれているように昭和十四年に京都博物館において展示され、以後消息不明という。『国書総目録』によると、

承久記　六巻　㊟軍記物語・絵巻　㊟月輪禅定書、土佐光信画　㊟高野山竜光院

とあるもので、この六巻本の第四巻に相当するか。もっともこの伝承が正しいとすれば、当巻は土佐光信画の模本で本文は

慶長本系とすると、いわゆる小野道風の書ける和漢朗詠集式で合わないことになるが、本文が慶長本の原形を示すのか、龍光院本の原本はどんなものであろうか。架蔵本も部分であり、見比べられないのが遺憾である。ともあれ、他に絵巻の存在の知られていない現在、たとえ一巻の模本といえども、問題提起となる資料と言えるであろう。

内容は、勢多、宇治川の橋合戦、宇治川の先陣争いなどで、『承久記』中のクライマックスの巻である。

次に、『承久記絵巻』本文の翻刻を行った。ただし、翻刻は現行の字体に統一した。元来絵巻であるから、絵の全部を紹介すべきなのであるが、なに分長巻なのでここではその一部分を示すに止まった。絵がありながら明らかに詞書を逸しているところが一個所あるが、これは架蔵本、慶長古活字本系無刊記整版本で補った。なお『保元物語　平治物語　承久記』（新日本古典文学大系）に「古活字本承久記」の校訂（益田宗氏）があるが、ここでの左下欄外の校異注記は、同慶長古活字本系整版本とのそれである。

注

（1）『訂正増補考古畫譜』（『黒川真頼全集第一』国書刊行会本叢書）。

（2）松林靖明校注『承久記　新撰日本古典文庫1』（現代思潮社、一九七四年九月刊）解説による。

（3）小柏信重著『承久記』（聚文堂、昭和五一年一〇月刊）。本書を、甲南女子大学図書館、および松林靖明氏の御厚意により参照できたことを御礼申し上げる。

（4）注（2）に同じ。

翻刻本文

〔詞　1〕図版参照

式部丞朝時は五月晦越後国府中に着て
勢そろへ有枝[一]七郎武者加地入道父子三人
大胡太郎左衛門尉小出四郎左衛門尉五十嵐
党を具してそ向ける越中越後のさかひに
蒲原と云所[二]にり一方はきし高くして人馬
更にとをりかたく一方はあら磯にて風はけ
しき時は船路心に任せす岸に添たる同そ
道間を伝ふてとめゆけは馬のはな五き十
きならへて通[三]るにわつかに一騎斗にあたはす
通る道なり市降浄土といふ所に逆茂木を
引て宮崎左衛門かためたり上の山には石弓
はり立ててきよせはは[四]つかしかけんと用意し
たり人々いかかすへきとて各々まち[五]くの儀を申ける
所に式部丞のはかりことに浜にいくらも有ける
牛をとらへて角先にたひまつをゆひ付て
七八十疋おひつゝけたり牛たひまつに恐れ
て走りつきとをりけるを上の山より是
を見てあはやてきのよするはとていし弓の
あるかきりはつしかけたれは多くの牛[六]いられて
しぬ去程に石弓の所はことゆへなく打過て
夜も明ほのに成けるにさかも木ちかく押よせて
みれば折節海面なきたりけれは賤木尻吹
のはやり雄の若ものともなきさにそふて馬
つよなるものは海を渡して向にけり又足軽
とも手々にさかも木とりのけさせて通る人も
さかも木の内には人の郎従とおほしきもの
二三十人かゝり焼て有けるか矢少々いかくる
といへとも大勢の向ふをみてみなうちすて
山へにけのほる其間にことゆくなく通りぬ

（絵1）図版参照。

〔詞　2欠　慶長本系整版本にて補う〕

越中ト加賀ノ堺ニ砥並山ト云所有。黒坂志保トテ。二ノ道アリ。
トナミ山ヘハ仁科次郎。宮崎左衛門向ケリ志保ヘハ。糟屋有名左

一、枝七郎武者――枝七郎カ武者
二、にり――アリ。モト「有」カ
三、通るにわつかに一騎斗にあたはす通る道なり――通ルニ不ト能ハ僅ニ一騎斗通ル道ナリ。
四、はつかし――「か」にミセ消チ
五、儀――議
六、牛――兵

衛門伊王左衛門向ケリ。加賀国住人林。冨樫。井上津旗。越中国住人野尻河上。石黒ノ者共少々都ノ御方人申テ。防戦フ。志保ノ軍破ケレバ京方皆落行ケリ。其中ニ手負ノ法師武者一人カタハラニ。臥タリケルカ。大勢ノ通ルテ見テ。是ハ九郎判官義経ノ。一腹ノ弟糟屋ノ有名左衛門尉ガ兄弟。刑喜坊現覚ト申者也。能敵ヲ打テ。高名セハヤト。名乗ケレバ。タレトハ不レ知敵一人寄合。刑部坊カ。首ヲトル。式部丞砥並山。黒坂志保打破テ。加賀国ニ乱入。次第ニ責上程ニ。山法師。美濃竪者観賢水尾坂ヲ堀切テ逆茂木引テ待懸タリ。

（絵2）絵1と連結している。図版参照。

〔詞　3〕

去ほとに山田次郎重忠はくひ瀬川の軍
やふれて後都へ帰参て事のよしを申
海道所々うちおとされ北陸道の勢も都
近くせめよるときこえしかは一院なにと
思召分たる御事ともなく六月九日酉の刻に
一院新院冷泉宮引くし進らせて日吉へ
御幸なる二位法印尊長はともへの大将の
御ともせられたりけるを組おとしてうた
はやとしきりにめをかけしたくせられけるを
子息新中納言の尊長かきみにめをかけ
進らせ候たゝし実氏死して後こそいかにも
ならせ給ひ候はめとて中にをしへたてくせられけれはさとられたりとおもひて左右なくもくます東坂本梶井御所へ入せ
給天台座主参らせ給てよもすから御物語
申させ給ひ君を守護し奉候はんする
大衆はみな水尾崎勢多へとてはせ向候ぬ
是はいかにもあしく候なんと申されけれは今日は
猶も宇治勢多かためられてこそ御覧せらめ
とむほんけつこうの公卿殿上人武士とも
進め申上る卯刻に都へくはんきよ四辻宮へ
入せ給て後は四方の門をとちられとかくの
きも仰られす月卿うんかくさるにても打
手を向らるへしとて宇治勢多方々へ分ち
つかはさる山田次郎重忠山法師はりまの
竪者小鷹助智性房丹後是等をはしめ
として二千よきを相具して勢多へ向ふ

一、右上ニ「四三」トアリ
二、候――候ゾ。
三、御覧せらめ――御覧セラレメト
四、各進メ

能登守ひてやす平九郎判官たねよし
小輔入道近ひろ佐々木弥太郎判官高重
中条下総守盛綱安藝宗内左衛門尉伊藤
左衛門尉是等をはしめとして一万よき供御
の瀬へ向ふ佐々木野前中納言有雅卿甲斐
宰相中將のりよし右衛門佐ともとし武士には
山城前司ひろつな子息太郎右衛門尉筑後
六郎左衛門尉熊野法師には田部法印十方
法橋万劫禅師なら法師に土護覚心
圓音これらを初として一万よき宇治橋へ
あひむかふなかせ判官代あたち源左衛門尉五百
よきにてまきのしまへ向ふ一条宰相中將
信能二位法印尊長一千よきにていも
あらひへむかふ坊門大納言忠信一千よき
にて淀へ向はる河野四郎入道通信子息
太郎五百よきにて廣瀬へとそむかひける[一]

（絵3）

〔詞　4〕

海道[二]の先陣相模守時房同六月十二日
勢多のはしちかく野ちに陣をとるはやりを
のものとも河はたにをしよせてみれは橋中
二間引おとしてかいたてかき山田次郎を
はしめとして山法師大勢陣をとる相模守
の手のもの共皆[三]見太郎佐々め早川重三郎
三人はしつめに押よせて戦けるか射しらま
されて引てのく二番に江戸八郎足立三郎
さぬき太郎三人けたをわたりけるかあまりに
つよくいられて二人引退く足立三郎鎧は
よしはしけたによろいうち羽ふきて居た
りけるか向よりさゝへて射けれはこらへかねて
引退く三番に村山たう八人けたを渡
けるか其もあまりにつよくいられて引退く

（絵4）

〔詞　5〕

四番に二十人つれたる兵はしけたを
わたりかいたてかきのきはへせめよせたり[四]
けるかあまりにつよくいけるあいた少々引退く

一、慶長本系、上巻終ル
二、右上ニ「四四」トアリ　慶長本系ハココヨリ下巻トナル
三、皆見――階見
四、わたり――渡リテ

其中に熊谷平内左衛門久目左近岩瀬左近
同五郎兵衛肥塚平太郎よしみの十郎子息
の小次郎廣田小次郎太刀をぬいて三の
かいたてを切やふつてしころをかたふけせめ
よする山法師さつと引てのきにける山田
次郎是をみて郎[一]等荒左近を使者にて
いかに大衆はあれほとの小勢にはひかせ給ふそ
かへさせ給へうしろをはかこまんと申けれは
播磨竪者引きにては候はすむ[二]にてこそ候へとて
かへし合て戦けり山法師はかちたちのたつ
しや[三]そのうへ大太刀長刀をもちてしけくうち
けれは武士は心こそかうなれとも小太刀にて
あひしらひ戦ほとに九人か中六人はかいたての
きはにきりふせられ平内左衛門尉これをみて
今はいかにもかなふましとおもひて其中に
むねとの者と見えける播磨の竪者とくんて
ふす平内左衛門取ておさへて首をかゝんとし
ける所に竪者か下人の法師寄合て長刀を
もつて平内左衛門かをしつけをてう〳〵と
二うち三打したゝかにうたれてかたふく様にし
ける所を山田次郎か郎従荒左近落合平内
左衛門かくひをとるよし見十郎子息小次郎
きりふせられけるをかたに引かけて河はたまて
のひたりけるうしろよりあまりにつよくいける
あひた子をは河へなけ入我身も河に飛入
水れんなりけれは水のそこにて物具ぬき
すてはたかに成て我方へおよき帰てたす
かりけり今は久来左近一人残りて身命を
すてゝ戦ける所にならの橘四郎平五郎
はしけたをわたつてつゝきたりけるをのり
こえおもてに立てそ戦ける
（絵5）

〔詞　6〕
爰[四]に宇都宮四郎頼なりおやの入道を
まつとて大勢には三日さかりたりけるか
勢待付少々[五]ものをはうちすてて上ける

一、郎等――郎従
二、むにて――帯クニテ
三、しや――者ナリ
四、右上ニ「四六」トアル。
五、少々ものをは――少々ノ者ヲバ

ほとて[一]勢多のはしの戦第二番のときに
五十六騎にてはせつきたり[二]橋の上の軍
をはせす橋より上一町あまり引上て
陣をとる向よりてきのいる矢のしけき事
雨のあしのことし宇都宮四郎河はたに
打立てたうの矢を射る所に熊谷次郎兵衛
尉直鎮高田武者所はせ来り[三]加り戦たゝし
小次郎兵衛はとを矢いす何とて射ぬそと
人にいはれてみなしろしめすやうに一谷の
軍に弓手の小かいなをいさせて候間遠矢は
つかまつりえす候とてきの矢たけのとゝかぬ
ほとに馬とも引のけ〳〵ひかへさせてさう色と
ねりともにてきの射すてたる矢ともひろい
あつめさせ主々の前にうちすて〳〵射させけり
熊谷次郎兵衛申けるは一時に事をきるへき
にてもなし各やすみ給へとて河はたちかく
打臥さまによろいうちはふきて皆臥たりされ共
なをてきはいやむ事なし宇都宮四郎か
臥たりける甲の鉢をいけつてぬひさまに
はち付のいたにしたゝかに射立たり白箆に
山鳥の羽にてはきたる矢しるししたりけるか真に
おほかりける[四]宇都宮[五]やすからすおもひ立あかつ

て見れは信濃国の住人福地十郎とし政と
矢しるし有十三束三ふせそ有ける宇都宮
四郎頼重[六]と矢しるししたる是も十三束二伏
有けるを以て川端に立て能引てちやう[七]と
はなつ川をすちかいさまに三町あまりを射
わたして山田次郎か川はたにからかささゝせて
軍の下知していたりけるに危ほとにそいかけ
けるいそきかさをとらせてだんにあかる水尾崎
をかためたる美濃の竪者くはんけん舟にて
こき来り川中にて是を射けり其中に
赤いとおとしのよろひきたる男ことにすゝみける
を宇都宮四郎例の中さしとつてつかひ
さゝへて射けれはくひのほねをいられて立も
たまらすまろひにけり次にくろかはおとしの

一、ほとて――程ニ
二、つきたり――著タリ
三、来り――来。
四、おほかりける――大ナリケル。
五、宇都宮やすからす思ひ――宇都宮四郎。甲ノ鉢ヲ被レ射テ。不スレ安ラ思ヒ
六、頼重――頼成（ヨリシゲ）
七、ちやうと――丙（ヒヤウ）ト

よろいきたる法師武者すこしもひるまず[一]
かかる所を二の矢をつかひて射けるに引合[二]
のふかにいられて河中へたをれ入にけり其後
美濃竪者も引退く

（絵6）

〔詞　7〕

相模守刑六兵衛[三]をめして此軍の有様
をみるに一日二日に事ゆくへきとも見えす
されは矢たねをつくしさのみ兵[四]の共うたす
へきにも非すしはししつめはやと思ふはいかにと
のたまへは刑六兵衛河はた橋つめにはせ向て
大将軍の仰にて候暫軍をしつめんと
呼りけれとも仰にもしたかはす猶もなのり
かけ〳〵戦けるか御使度々に及高らかに
割けれははけたる矢をはつし河端はしの
上の軍と、まりけり爰に供御の瀬へ
武田五郎城入道うけ給て向けるに何くより
来りとも覚す上の山より大妻鹿一おちて[五]
来れりてき御方あれや〳〵とさはく所に
甲斐国の住人平井五郎高行か陣の前を
走通る高行元より弓[六]の上手にては有引立
たる馬なれはひたとう[七]ちのり弓手にあひ
付て上矢のかふらをうちつかひしはしひきて
はしらかし三たんはかりにつめよせて思白毛の
本を鏑はこなたへぬけよとひやうといる鹿矢の
下にてまろひけるゆ、しくそ見えし貴賤[八]
興をもよをしけり武蔵守くこのせを下りに
宇治橋へむかはれけるか其夜は岩橋に陣を
取足利武蔵前司義氏三浦駿河守義村
是等はとをく向候へはとて暇申て打通る義氏[九]
宇治の手に向栗こ山に陣を取[一〇]

（絵7）

一、すこしも――少モ（チット）
二、矢を――矢
三、右上ニ「四七」トアリ。
四、兵の共――兵共（ノモ）
五、来り――来
六、弓の上手にては有――鹿（シ）ノ上手ニ聞ヘテハアリ。
七、うちのり――乗侭（ルマヽ）ニ。
八、「貴賤興をもよをしけり」ナシ
九、義氏――義氏ハ
一〇、向――向ンスレ共。

〔詞　8〕

駿河次郎[一]同く陣をならへて取たりけるか
父駿河守に申けるは御とも仕るへう候へとも
権大夫殿の御前にて武蔵守殿御供仕候はんと
申て候へいとま給りてとゝまらんすると申
駿河守いかにおやのともをせしといふそ駿河
次郎さん候尤やすむらもさこそ存候へとも
大夫殿の御前にて申て候事の空ことに
成候はんするは家の為身のため悪く候ひなん
御ともには三郎光村も候へは心安く存候と申
けれはさては力及はすとて高き所に打上て
駿河次郎を招て軍にはとこそあれ角こそ
すれ若党とも余はやりてあやまちすな河
はたへはと向へ角むかへなとよく〳〵をしへ郎等(テ〔ママ〕)五十人
わけ付てつかはされけり[二]ともする家の子には
佐野与一郎等には乳母子の小河太郎おなしく
五郎阿曽太郎同次郎山崎三郎なわ藤八
これらなり其中に十四騎すゝんて申けるは
いまた案内もしらせ給はす我等も存せす[三]候
されは先様に罷向候て事のていをもうかゝひ
み川の有様をも存仕候はん又大雨にて候へは
御宿をもとりまふけ候はんとて進行是は
海道尾張川より給て[四]所々の戦に我等も
若党も甲斐々しく軍せぬ事を口惜思て
今日あひかまへて合戦をせよとて内々心を合せ
さしつかはしけり其後駿河次郎雨にあまりに
ぬれたりけれは馬より下り物の具ぬき
かへ腹帯しめなをしなとしける所にかち人
少々はしり帰て御前に進まれ候つる殿原
はやはしのきはへ馳より御手の者[五]と名のつて
矢合[六]に軍始めて候某々手おふて候と申けれは
小川太郎足利殿に此よしを申はやと申駿河
次郎しはしな申そとて物具の緒をしめ
おほせて馬にひたとのりくつろけて行とて
はや申せとてそゆきける

（絵8）

一、右上ニ「四八」トアリ
二、ともする――留マル
三、存せす――存知セズ
四、給て――始メテ
五、者と――者ノ
六、矢合に――矢合シ

〔詞　9〕

駿河次郎[一]うち橋ちかく押よせて見ければ
けにも[二]軍はまつさかりなり馬よりをり橋つめに
立て桓武天皇より十三代のめようゑい相模国の
住人三浦駿河次郎やすむら生年十八歳と
名乗て甲をはぬひてなけのけ指つめ引
つめ射けり乳母子の小川太郎甲を取て
きせけれはぬひてはすて脱てはすて二度
まてそしたりける是は矢つよくいんためなり
小河太郎主と同矢束なりけるか始は大将あな
かち手おろし軍するやう候はすといさめけるか
やす村にいられてて[三]きさはく気色をみて
左候はゝつねかけは射候はて矢たねつくさて
いさせ進らせんとてならんてそ立たりける
向のきしへはふつうの矢たけとゝくへしとも
見えぬ所にむねとの人かとおほしきを能引て
そいたりける駿河次郎さゝへて射矢二つ
三つ射まとはされまくのうちさはきあへりいそき
まくを取て向の堂の前[四]にそのきにける後に
き[五]ゝけれは甲斐宰相大将なり向のきしにならし
法師熊野法師数千きむかひたる其中に
ふとうこんからせいたかとうしを笠しるしにつけ
たるはたとも打立て有けるか河風にふかれて
なひけるはまことにおそろしくそ見えたりける

（絵9）

〔詞　10〕

武蔵前司[六]義氏はせ来り相加てそ戦
ける駿河[七]次郎手もの共散々に戦少々は
手おふてそ引退く日もくれ行は武蔵前司
平等院に陣をとる駿河次郎も同く陣をそ
取たりける甲斐国の住人室伏六郎を使者と
して武蔵守へ申されけるは駿河次郎か手者[八]
早軍を始て少々手おひ候義氏か若とうとも
あまた手おひ候日暮間平等院に陣を取候

一、右上ニ「四九」トアリ
二、けにも――現ニ
三、てきさはく気色をみて――敵サハギ各々気ヲ見テ。
四、前にそ――前ヘゾ。
五、き、けれは――聞ヘシハ。
六、右上ニ「四十」トアリ、上に「十カ」とアル。
七、駿河次郎手もの共――駿河次郎ノ手ノ者共。
八、手者――手ノ者共。

京かた向の岸に少々舟を浮へて候橋を渡て
一定今夜夜うちにせられぬと覚候小勢に候へは
御勢を添られ候へと申されける武蔵守こは如何に
さしも明日[一]と方々軍のあひつをさためける
かひもなく軍始けんなる此人々若夜討にせら
れては口惜かるへしいそきものとも向へと宣ひ
ければ平三郎兵衛尉もりつな奉てはせ参り
あひふれけれとも武蔵守殿打立せ給時こそ
とて進ものこそなかりけれされとも佐々木三郎
左衛門尉信綱はかりそ罷[二]むかふへき由申たり
ける六月中旬の事なれは極熱の最中
なり大雨のふる事只車の輪のとし[三]よろい
甲に瀧をおとし馬も立こらへす万人目を
見あけられねは我等いやしき身[四]として忝も十善の
帝王に向進らせ弓を引矢を放んとすれはこそ
兼てみやうかもつきぬれてとて進ものこそなかり
けれされとも武蔵守はかりそ少も臆せすさらは
打立者ともとてやかて甲の緒をしめ打立
給ひけり大将軍かやうにすゝまれけれは残留
人はなし又夜中に宇治橋ちかくおしよせて
みれは駿河次郎昨日のうす手おひの若党共
矢合はしめて戦けり武蔵前司の手者共
同をしよせ[五]戦しはしさゝへて引退く二番に
相馬五郎兵衛土肥次郎左衛門尉苗田兵衛平兵衛
内田四郎吉川小次郎押よせてさんくに戦ふ
少々手おふて引退く三番に新開兵衛
町野次郎長沼小四郎各其国の住人某々と
名乗て橋けたを渡りかいたてのきはまて
せめよせたりけるをてきあまたよせ合三人三所
にてそうたれける四番に梶小次郎岩瀬七郎
推よせてさんくに戦て引退く五番に波多野
五郎信政引たる橋のきはまて押よせたり
是は去ル六月くひせ川の合戦に尻もなき
矢[六]にひたいをいられたりけるかみかんはかり
はれたり進み出て名乗る相模国の住人
信政とて橋けたを渡し向より敵のいる矢
雨のことくなるに向のきしを見んと振あをの

一、明日と――明ルト。
二、罷――死ヲ消シ右ニ罷トスル
三、とし――如シ。
四、身――民
五、よせ戦――寄テ戦ヒ
六、矢に――矢ニテ

きたる右の眼をしたゝかにいられて川へすてに
おちんとす橋けたに取付て心ちをしつめ[一]向んと
すれは先も見えす帰らんとすれはてきに後ろを
見せん事[二]の口惜かるへしとおもひけれはうしろ
さまにそしさりける橋の上へしさりあかり取て
かへしける所に郎等則久つとよりかたに引かけ
かへりけるか河はたの芝のうへにふせて二人左右
より寄てひさをもつておさへて矢をぬひて
けり血の出る事よろひにくれなひをなかして
誠におひたゝしくそ見えける
（絵10）

〔詞　11〕
[三]武蔵国の住人塩谷左衛門尉家友押寄て
戦けるかいたをされぬ子息六郎左衛門尉家氏
おやをの[四]り越矢おもてに立て戦けるかこれも
うすておふて父をかたに引かけてそのきにける
其後各をしよせ〳〵戦けり宮寺三郎須黒
右馬允飯高小次郎高田武者所大高小太郎
息津左衛門尉高橋九郎宿屋次郎高井
小次郎押寄ておとらしまけしと戦て是等も
手おふて引しりそく京方よりなら法師
とこ覚心圓音二人はしけたを渡て出来たり
人ははひ〳〵わたる橋けたを是等二人は大長刀を
うちふつておとり〳〵曲をふるまつてそ来り
ける坂東のものともこれをみてにくいものゝ振舞
かなあいかまえて射おとせとて各これをさゝへて
射る先立たる圓音か左の足の大ゆひを橋
けたにいつけられおとりつるもうこかすいかゝ
すへしともおほへさりける所につゝいたる学心[五]
刀をぬひて射つけられたるゆひをふつと
切すてかたにかけてそのきにける
（絵11）図版参照

一、しつめ――沈(シツメ)テ
二、事の――事
三、右上ニ「四十二」トアリ、上ニ「廿壱」カトヨメルノ貼紙アリ。不審
四、のり越――乗越テ。
五、学心――覚心

〔詞　12〕

武蔵守[一]此軍の有様をみるにきつと勝負
あるへしとも覚[二]へす存むねあり暫軍を
と、めんとおもふ也と宣ひけれは安東兵衛
尉はしのつめに近よるをしつめけれとも
しつまらす二番に足利武蔵前司馳寄て
しつめられけれともしつまらす三番に平三郎
兵衛盛綱よろひは脱て小具足に太刀斗
はひて白母衣をかけはしのきはまて進て
各軍を仕てはたれよりけんしやうを取らんとて
大将軍の思召やう有て静めさせ給ふに
誰々進んてかけられ候そしるし申せとて
盛綱うけ給はつて候なりとたしかに申けれは
其時侍所の司にては有人におほく見しら
れ一二人きかぬほとこそあれ次第によはゝり
けれは河はた橋のうへ太刀さし矢をはつし
て静[三]りてけり武蔵守芝田橘六をめして
河を渡[四]らんとおもふに此水のほとには一尺はかりも
まさりたるな此下にわたる瀬やある瀬ふみ
して参れとのたまひけれはうけ給り候とて
一町はかりうち出たりけるか取てかへし検見を
給はり候はやと申尤さるへしとて南条七郎を
めしてさしそえられ二騎つれて下様にうち
けるかまきのしまの二またなる瀬を見渡し
けるにあやしの下らうの白はつなる翁一人
出[五]来りの是をとらへて汝は此所の住人案内者
にてそあるらん何くのほ[六]とに瀬のあるたし
かに申せけんしやう申行へし申さすはしや
首きらんするそとて太刀をぬきかけてとひ
けれは此おきなわなゝきて瀬は爰はあさく候
かしこは深く候とおしへけれは能申たりとて後には
首を切てそすてにけるまた人にいはせしと
なり
（絵12）

一、右上ニ「四十二」トアリ
二、覚へす――不レ見。
三、静りてけり――静リニケリ。
四、渡らんと――渡サント
五、出来り――出来レリ。
六、ほとに――程ニカ

〔詞　13〕

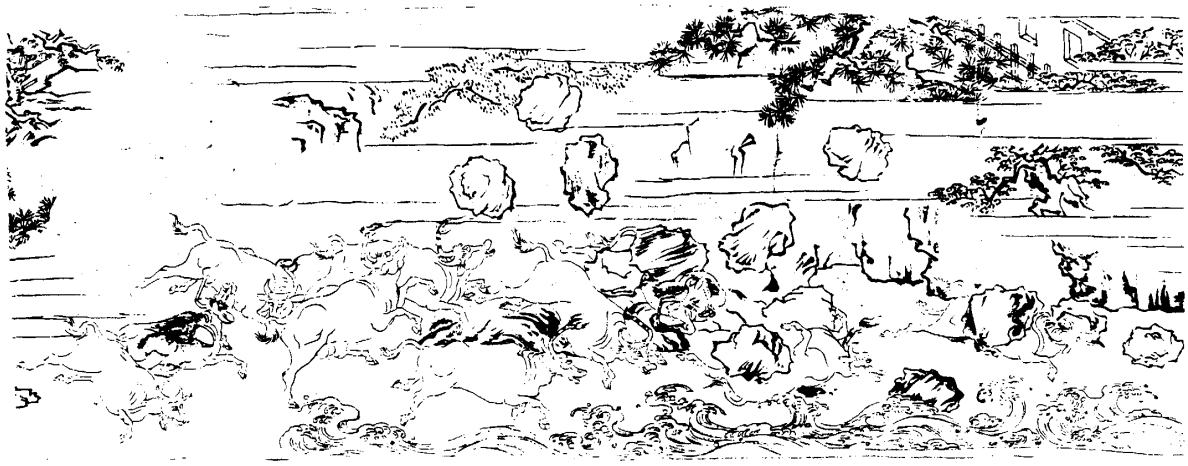
其後馬[一]よりおりてはたかになり刀をくはへて
渡るけんみの見る前にては浅き所も深きやうに
もてなしはやき所〇ものとかなるやうにふるまふて
中嶋におよきつきてみれはむかひにはてき
大勢ひかへたりさて此河はさそあるらんと見渡
して取てかへし瀬ふみをこそ仕おほせて
候へと申けれは佐々木四郎左衛門尉御前に候か
芝田か申詞をきゝもあへすうつたち馬にひたと
乗てしもさまにはせて行芝田橘六あな口惜
是に前をせられなんすと思て同く馳て行
佐々木前に立て爰か瀬か〳〵と云けれはいまた
はるか〳〵とて槇嶋の二またなる所の我せふみ
したる所へ馬のはなを引むけかはとおとさんとす
芝田か馬は鹿毛なるか手かひにて未のり入されは
河面大雨降て洪水みなきりおち白浪のたち
けるにおとろいてはなあらし吹て取てかへす引
ふけてむちをしたゝかにうちておとさんとす
佐々木是をみてこはいかにかしこは瀬にて有
ける物をとおもひて引かへし芝田かそはより
かはと打入て渡しけり佐々木か馬は権大夫殿
より給りたりける甲斐国白歯立黒くりけ
なる馬[二]の下尾白かりけり八寸の馬其なを
御局とそ申ける馬[三]のおつるを見て芝田か
馬[四]はつゝいておつる河中迄は佐々木か馬の
むちにはなをさすほとなりけるか元来馬
おとりたれは次第にすてられて二たんは[五]かり
さかりたる佐々木いまた向のきしへもあからす
して近江国の住人佐々木四郎左衛門尉源
信綱今日の宇治川の先陣なりとたからかに
そ名[六]のりたる同くつゝいて奥州の住人
芝田橘六兼能今日の宇治川の先陣と
同音に高らかにそのゝしりける
（絵13）

一、右上ニ「四十三」トアリ、上ニ「廿五」と貼紙アリ
二、馬――駄
三、馬――駄
四、馬は――馬モ
五、はかり――計リゾ
六、名のりたる――名乗ケル

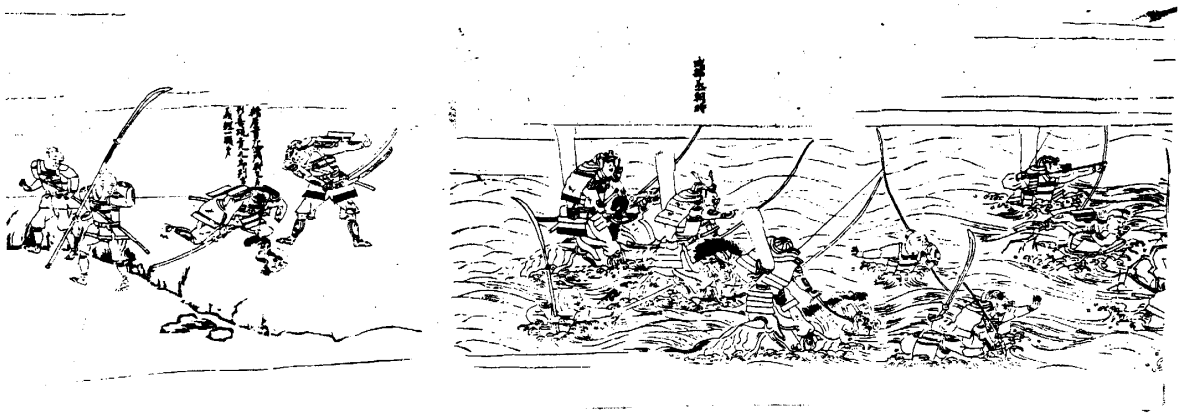
図版

〔詞書１〕冒頭

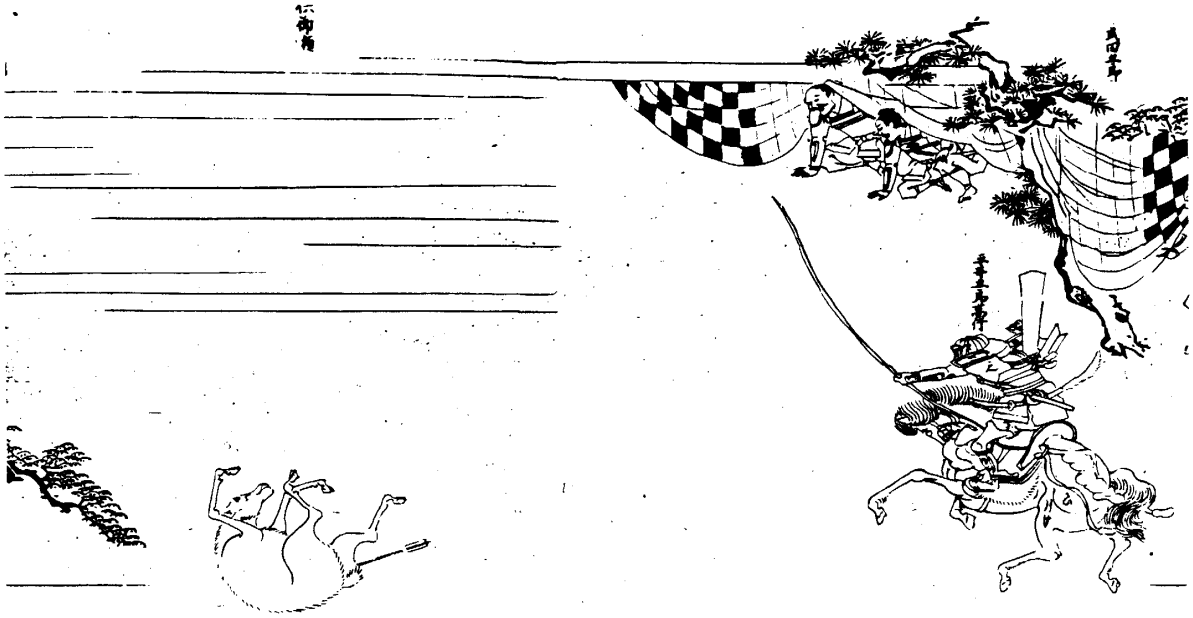
〔詞書１〕続き



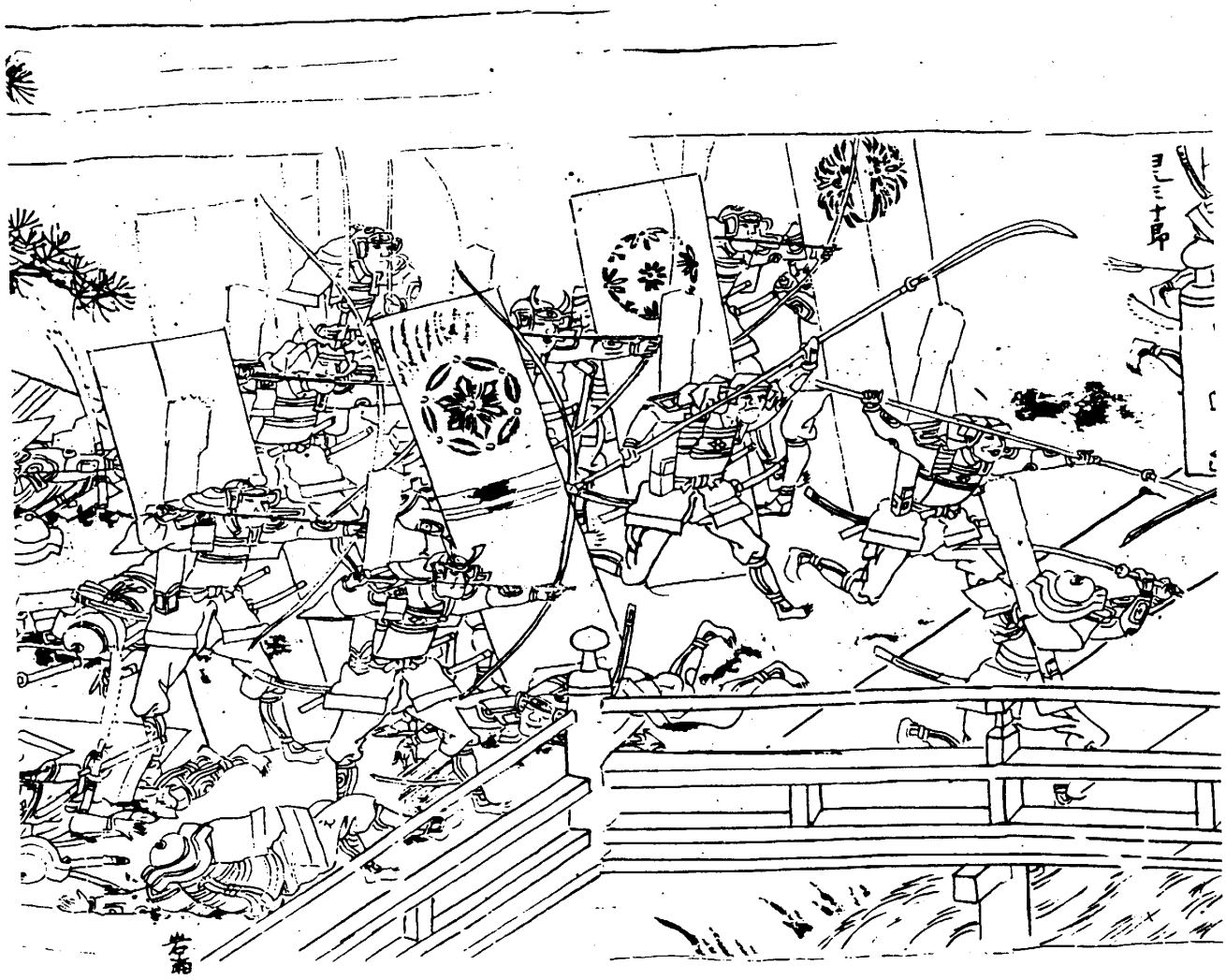
（絵１）松明をつけた牛が石弓に射たれる。



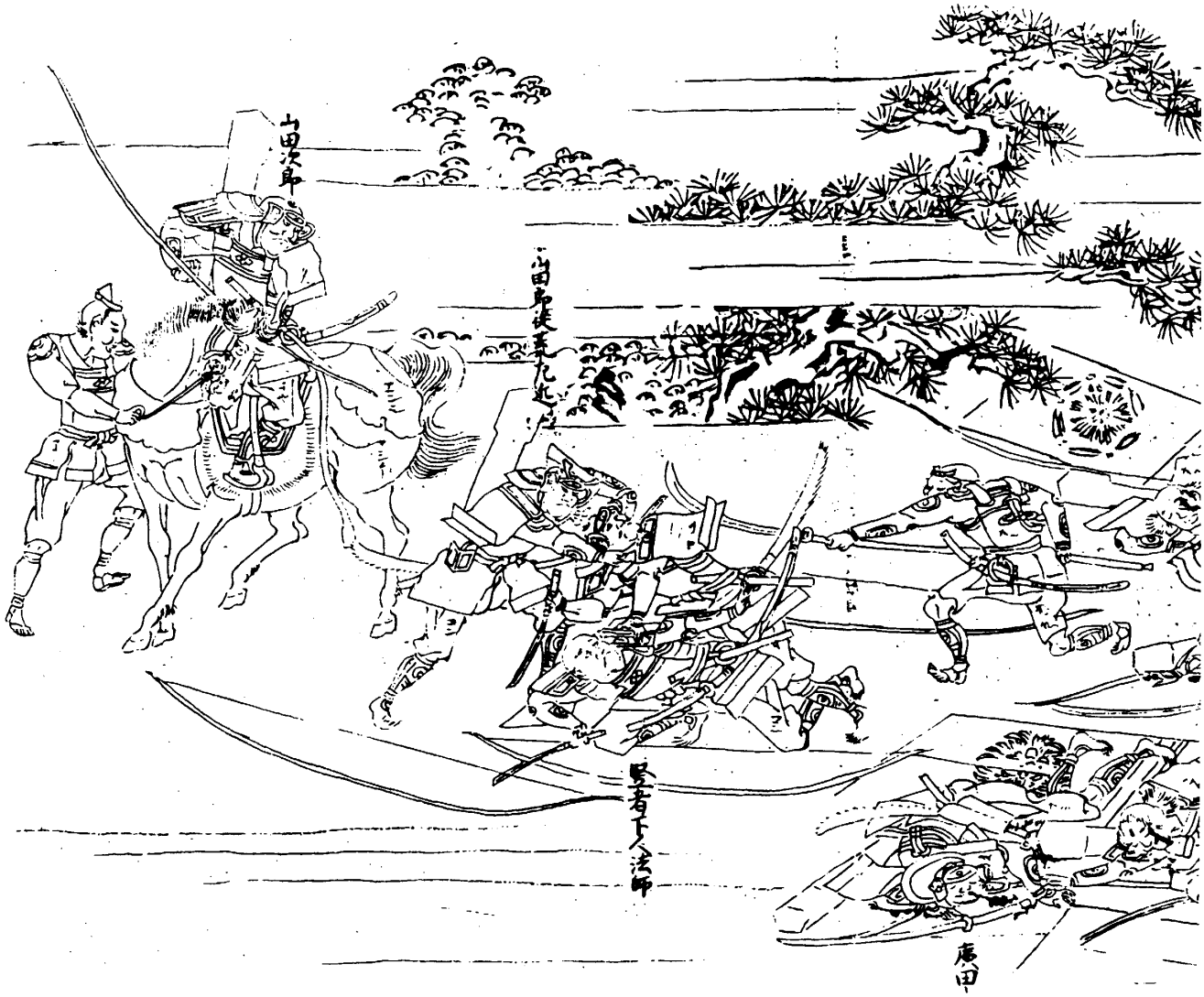
（絵２）第１図と連続し、詞書を脱している。
海を渡る朝時、首を討たれる現覚。



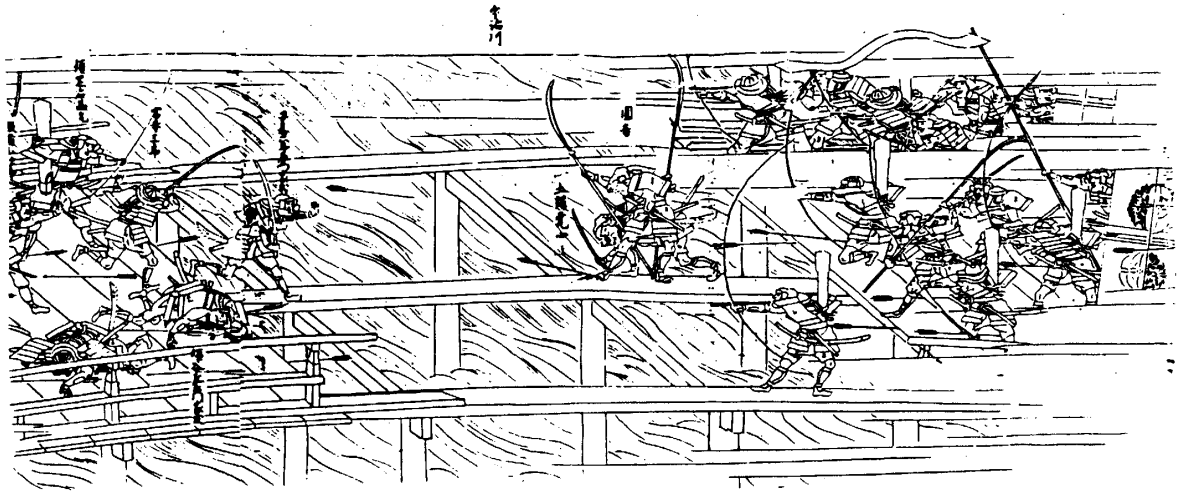
（絵７）平井五郎妻鹿を射る。



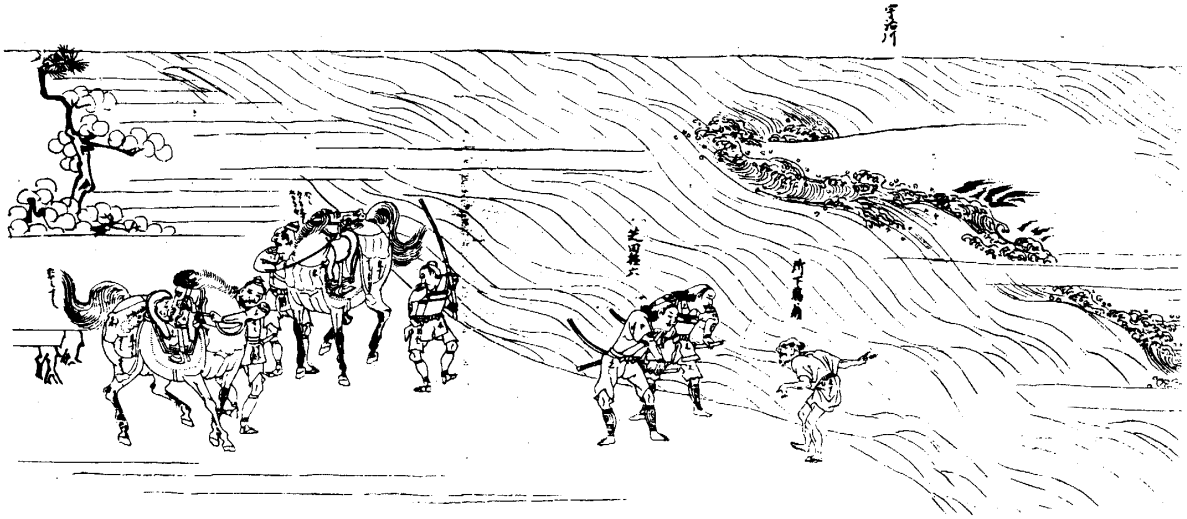
（絵５）勢多橋合戦。播磨竪者の首を掻こうとして、
荒左近に首を掻かれる平内左衛門。


山田次郎
山田郎従五九郎
堅者下人法師
唐田

（絵10）信政の眼に立った矢を抜く。



（絵11）矢のささった圓音の足の指を切り落す覚心。



（絵12）翁に浅瀬をきく芝田権六等。

〔詞書13〕

〔詞書13〕巻末